

佳作

ピアノ・コンクール

オーストラリア アデレード日本語補習授業校一年 ラガナ マリア

私は今年、八月七日に南オーストラリア州で開催されたピアノのコンクールに出場しました。

コンクール前の五月に学校の体育の授業で創作ダンスをしていた時、私は肩を痛めてしまいました。しばらくの間は、全く動かすことができず、ピアノの練習だけできなく、運動も勉強さえもできない日が続きました。

鍼に通ったり薬を飲んだりして、少しずつ良くなりましたが、肩に負担がかかるので、普通にピアノの練習をすることができず、軽く指の動きの練習をしていました。七月になり、やっと普通に曲が弾けるようになりましたが、その頃には、もうコンクールまで少ししか時間がありませんでした。私はロシアの作曲家部門に出場することになっていました。

しかしロシアの作曲家の曲は、手の小さな私には指の開きが大きすぎて、普通の人以上に肩に負担がかかったり、指の動きに工夫が必要で、高度な技術が要求されました。少しあきらめた気持ちにもなりながら、「せっかく今まで練習してきたのだから、自分のベストをつくした演奏をしよう。」と思い、出場しました。

十五才以下の部門だったので、私より年上の大きな人達がとても力強い演奏をしていました。みんなとても上手でした。私の順番になり名前が呼ばれ、舞台上上がりピアノの前に座りました。心臓が破裂しそうなほどドキドキしました。一曲目を弾き始めしばらくすると緊張がとれ、心が曲と一

緒に歌い始めました。途中少し間違えましたが、止まることもなく、最後まで弾き終えることができました。とてもすがすがしい良い気持ちでした。席に戻ると母が

「上手だったよ。」

と言いました。

「審査員が身体をのり出して聞いていたよ。」

と話してくれました。

全員の演奏が終わり、審査の発表がありました。三位まで賞があるはずなのに、審査員が、「一位と二位しか出さない。」と言った時、私は「あーだめだった。」と思いました。二位の人の名前が呼ばれました。「一位はだれ。」と思いました。そして私の名前が一位で呼ばれた時、「私が？」とびっくりしました。辛かったけれど、がんばって練習してきて、一位をもらえてとてもうれしかったです。ゴールドメダルを首にかけてもらった時、叫びたいほどうれしかったです。審査員に

「とても芸術的な演奏だった。」

と評価されました。最後まであきらめず、心をこめて演奏することができて本当に満足しました。

音楽を通して知ることのできた「あきらめず努力し、得ることのできた感動」は私の大切な経験です。